

部落規約にみる村落生活

——熊本県上益城郡矢部町——

松 本 寿 三 郎

は し が き

近世農村において村落生活を自治的に規制するものとしてひろく村規約があり、村落が共同体的な運営のもとにおかれていたことは幾多の先学によつて明らかにされたところである（前田正治氏「日本近世村法の研究」に詳しい）。このような共同体的性格は明治以来の政治体制の変化に伴なつて当然変化したものと考えられる。農地の私的所有・経営の独立・税制改革などの諸政策は農民を共同体的規制から解放し、完全な意味での自立農民が誕生し、従つて村落生活は個人的利害を中心とする人々の行動によつて営まれるべきである。そのような意味において國家と個人（家）との仲介として、近世的な農村に代つて明治22年新しい町村制が成立したのである。所謂行政村とされるものがそれで、現在の町村役場は統一的行政機関としての役割をもち、それ以外に行政を担当する機関はないのである。したがつてこゝでは旧來の村（部落）は行政村の末端たる大字（または小字）として把握されるにすぎず、部落自身は行政・財

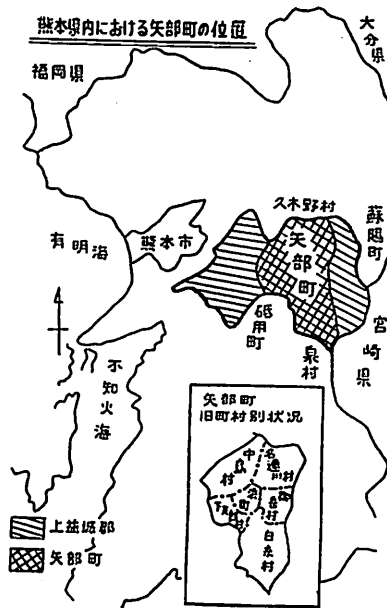
政権を有しない。

注 地方制度の変遷については大島太郎「地方制度（法体制準備期）」・大島美津子「地方制度（法体制確立期）」（『日本近代法発達史5・8』）・徳田良治・福島正夫「明治初年の町村会」・徳田良治「明治初年の町村会の発達」・「わが国における町村会の起源」大島美津子「地方自治制の制定」（『明治史研究叢書』第一期・才二期）・熊本県の場合については鈴木喬「鹿瀬監獄後の県治」「大小区制と地方自治」「地租改正と町村合併」外海卓雄「郡区町村編制法」「市町村制の実施」（『熊本県史近代編第一』）・森田誠一「農村の推移と県政」（『熊本県史第一巻』）など参照

このように行政的に独立体としての機能を失つた部落は、社会生活の面でも完全に行政村の中に埋没してつたのであろうか。前述の諸条件は部落独自の政治的体制を崩壊させる方向を示しこゝしたが、部落はまだ生活共同体として命脈を保っており、それは部

落諸行事が部落寄合における決議すなわち部落規約に示されることで明かにし得よう。かくて現在の農村生活は共同体的慣行なり、部落規約によつて規制されるのである。

本稿では矢部町における部落規約を通じて村落生活における共同体的規制について考えてみたい。



一 矢部町の地理的歴史的概観

矢部町は熊本市の東約四五キロの浜町を中心とする町で、東および南は同郡清和村および八代郡五箇荘を隔て、宮崎県に接し、北は阿蘇外輪山頂で阿蘇郡と接する。この地は九州山脈と外輪山にかこまれた山村で標高平均四五〇米、山あいの谷間に村落が散在し俗に「矢部四十八谷」といわれる。起伏の多い山間地帯のため交通に恵まれず、県内でも開発の遅れた処とされている。

表一 矢部町における土地面積 (ha)

	私有地	公有地	国有地	比率
田	1748.5	0	0	5.8
畑	919.1	0	0	3.1
山林	9304.0	1240.0	8192.2	62.3
採草地	4363.3	584.5	373.2	19.4
放牧地	0	300.0	0	1.0
原野	0	0	1392.0	4.6
公共用地	0	302.1	609.7	3.0
宅地その他	175.2	23.1	32.5	0.9
計	14485.1	2449.7	10598.6	100.

昭和35年 農業センサスによる

矢部町の村落については和名抄に宅部郷が見えて平安末には存在したらしく、新撰事蹟通考(肥後文獻叢書才三巻所収)によると、鎌倉時代に阿蘇惟次が浜町に居を定めたところ。また正平九年(一三五四)の矢部郷村注文には総数五四村があげられ、五万分之一の地に照合してみると殆んど現大字と一致する(阿蘇文書一五〇付)。南北朝期すでに大部分の村落が成立していたことが知られる。近世に入つてこの地方は矢部手永を形成する(旧朝日村を含めて七四村からなり、肥後藩における最大の規模をもつ手永である)。明治二三年町村制によつて下矢部村、浜町、中島村、白糸村、名連川村、御岳村、朝日村になり、やがて昭和三〇年以降町村合併がなされて朝日村を除く六ヶ町村が合併し矢部町となったものである。

矢部町の土地利用を分類すれば才一表の如くである。土地は山林、原野が八五%をしめるがそれらは交通不便なため戦前には林業を業とし得ず、また山林の開発もおくれており、主要産業は農業であつた。昭和三五年センサスによつて特性別世帯数をみると次の如くである。このうち製造・商業・サービス・勤労者および準世帯の

特性別世帯数

世帯総数	4,861
漁業	1
農業	2,462
製、建、鉱	189
商、サービス、自由	714
勤め人 労務者	1,104
無 (内職)	236
準世帯	155

昭和35年センサスによる

大部分が市街地である大字浜町・下市・千滝・下馬尾・城平などに集中しているの、山間に散在する部落では一―二戸の雑貨屋のほかは殆んど農業に従事しているといえる。

戸数の上から村落形成をみると、市街地をなす大字浜町・畑・下馬尾・下市・千滝などに著しい発展がみられるのに対して、散在部落は比較的に変動が少ないのが対照的である。明治一五年の「上益城郡村誌」と昭和三五年の「国勢調査概要」とを比較したものが次表であるが、農業（近年交通の発達によつて若干現れた林業従事者も含まれる）を主産業とする部落は明治以後においてもそれほど増

農家戸数増加率

大字	14
減 ~ 0	4
0 ~ 0.1	4
0.1 ~ 0.2	5
0.2 ~ 0.3	0
0.3 ~ 0.5	3
0.5 ~ 0.6	3
0.6 ~ 0.9	4
1.0 ~ 2.0	4
2.0 ~ 3.0	1
3.0 ~ 4.0	2
4.0 ~ 5.0	3
5.0 ~	

加していいことが指摘できよう。この町の推移を知る上で重要なポイントである。明治以後散在部落の周辺で増加した戸数のうちには、営林局事業所従業職員のみの部落が四部落ほどあり、開拓団による部落二つがある。また最近外来者のための団地が三・四箇所造成された。これらは既成農林の部落から完全に独立している。

二 部落規約の所在

矢部町は大字であるが行政区としての駐在区では九四の区域に分れており、さらに生活集団としての部落は二〇〇程になる。そしてそれらの中には旧藩期の村がそのまゝ、一部落で一大字という処もあれば、旧藩の村で一部落だが他と合して一大字をなすもの、旧藩の小村で一部落をなすものなど種々である。これらは合併前の行政村による整理統合や部落間の距離・戸数など諸条件によつて異なっている。そして大字の規模の大小によらず、村落形成の一単位としての部落が、一つの生活集団としての規約をもっている。たとえば大字白藤は旧藩期の白石村と相藤寺（旧犬飼村の小村）からなるが双

方は部落としては独立した規約を有するという具合である。

現在までに採訪した部落規約は旧中島村と白糸村の一部を除いて矢部町全域におよぶ三二部落のものである。それらの名称は次の如くである。

旧浜町

1 南田部落 部落規約書 昭和三十三年改

2 (山田) 初会議書類 自二十八年
至二十八年

3 矢部町大字杉木規約

4 (市原) 規約書

5 芦屋田部落規約 昭和三十六年四月一日

6 寺川部落規約条例

7 梅木部落規約

8 下大川元組規約書 昭和三十二年一月

9 千滝元組部落規約

10 (桐原) 昭和三十八年度決議事項

旧白糸村

11 (犬飼) 規約 昭和三十六年一月

12 矢部町田吉区規約 昭和三十一年起

13 (白石) 昭和三十八年度部落初会議決議事項

14 (相藤寺) 昭和三十八年度初会議決定事項

15 長野部落 規約

16 (爰石) 初会議録 昭和三十八年一月廿日

旧下矢部村

17 昭和三十三年度牧野規約書

18 (白小野) 昭和三十八年度発会議事録

19 (藤木) 部落協定記録

20 (万坂) 昭和三十一年度初集協議事項

21 (瀬峯) 議事録

22 北川内区規約

旧御岳村

23 (入佐) 初会議決議事項控

24 麻山駐在区規約

25 (後谷) 昭和三十七年度規約

26 矢部町大字下川井野部落会規程

27 (小笹) 昭和三十五年度規約

28 男成初会議録

29 (川内) 昭和三十八年度部落規約

旧名連川村

30 (才三駐在区) 部落規約

31 (才一駐在区) 昭和三十八年度春季總會議事録

旧中島村

32 矢部町大字田小野部落規約

現在までの調査によつて部落規約の存否をみると、規約があつてそれに従つて生活が規定される處は、すくなくとも近世以来の村落であり明治以後にできた集落（国有林労働者の村落や団地など）や、明治以前の戸数よりも明治以降の移入者が圧倒的に多い浜町・下市・下馬尾・千滝・城平など市街部には存在しない。このことは規約の及ぶ範囲にも示されるものであつて、明治以後の町村合併や大字の改編・統合によつて、部落が行政的に独立しなくなつても集

落の上では独立した形が保たれ、社会生活は独立して行なわれる場合、例えば旧御岳村大字川野は川内と横野が合併したものであるが、その生活集団としては川内部落規約と横野初会議々事録とに規制されるもので、同じ大字であつても例えば役金負担について横野部落民は賃貸価格一円に対して四円・他部落民は二〇円と差別するのである。こゝでは部落が依然生活集団として生きているわけで、そのような形で保たれた部落における伝統的な慣習が成文として残されたものが、部落規約なのであろう。

従つて部落規約の性格はとくに部落の共同体的な面に多くの意義をもつものであり、内容の面でも部落行財政・共同作業・共有財産・共通の利害などが主たるものとなることも自ら首肯できるであらう。而して規約には共同体構成員と入居者の間に厳然たる区別を画するものであつて、元来同質の社会構成員たる部落民のみが参加する一部落民だけに及ぶ閉鎖的なものであつたとみるべきである。このことは明治以降の戸数増加によつて従来の戸数よりも入居者の戸数が多くなつた下大川・千滝など市街地周辺において、もとからの人々だけが「元組」として規約していることから察することができよう。

また旧藩期にも小村であり現在でも小字として行政的には全く独立性のない爰石・瀬峯・北河内において規約が作られているのは、旧村大字が共同生活の単位としては余りにも大きく且つ村落が分散的であるという事情からそのような形をつつたものと思われる。

規約の名称は前に掲げたように、部落規約・規程・議事録などであるが、内容的にこれを見るといづれも村落における生活上の規定

を中心としている。これを形體的に分類すると、イ、制定された規約が数年間継続されるもの、毎年初会議に上程され審改められるものの二種に区別できる。

前者に属する下大川規約では

「本規約は時制に伴ざるを生じたる時若しくは適当ならざる時は組合員の総意により是を改制する事を得る。又は不備の点ある時は総意により追参することを得る」

として昭和三年以来今日まで本文には変化なく時によつて運用の点で修正されている。このようにして成立した現行規約のうち成立年度の明らかなものは次の一部落であり、名称はすべて規約といつていい。これとて村落生活を規定するものである以上は現実との

現行規約の成立

部 落 名		成立年度
南	田	昭和35年
山	田	" 28 "
芦	屋	" 36 "
田	吉	" 31 "
牧	野	" 32 "
藤	木	" 31 "
麻山	(前谷)	" 24 "
下	川井	" 34 "
小	笹	" 35 "
御	所	" 31 "
下	大川	" 32 "

隔りはあつてならないものであるから、とくに貨幣価値の変動などについては敏感であり、その部分についてのみ変更されることも少なくない。麻山部落規約では

才十条歩金ヲ左ノ通り定メル

1 他所役 三十円

2 村役 二十円

但シ女ノ場合ハ八分立トスル、農繁期ハ五割増トスル

3 土俵ハ五円トスル

という項目だけが変更されて次のように変化している。

麻山、歩役金の変化

	他所役	村 役
S 24	60円	40円
S 27	100	60
S 29	150	100
S 31	250	200

村落生活における法としての部落規約は村民に周知させる必要があるため、後者の形をとることが多い。初会議はこの規約確認が主な職事であつたので、初会議記録は年々規約確認のみ記されていることが多いように思われる。入佐部落の初会議記録では「部落条例の件、昨年に

同じ」とわずか一行で済ませている。しかしこの件は単なる一行の職事でなくそれが逐条審議されたであろうことは、昭和三十年三月の下名連石区「春季総会議事録」の議事進行ぶりから察せられる。こゝでの会議はその時々事項についての部分が駐在員から報告され規約については別個に審議されている。

一 駐在員報告

1. バス運行について
2. 牧野の柵林造成について
3. 本年度原野火入期日について
4. 駐在員任期満了につき改選について
5. 二十九年度実施原野火入れの費用弁償について
6. 「役」の事前申込み励行について
7. 駐在所新築寄附金について

第二表 桐原における規約内容

明治 44	大 正 2	大正10	昭和 6	昭和16	昭和26	昭和38
1. 役夫賃金 役 男	○ ○ 出夫時間	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○ 出不足規定	○ ○ ○ ○	○ ○ ○
2. カシキ伐	○	○	○	○		
3. 仔牛馬祝 放飼規定	○ ○	○ ○	○ ○ 養鶏規定	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
4. 神田徳米 祭 礼	○	○	○	○	○	○
5. 道路作り	○	○	○	○	○	○
6.	役金割賦方法			○	○	○
7.	集会規定	○	○			
8.	盗伐制裁	○	○	○		
9.	役 人 給	○	○	○	○	○
10.						公休日規定

8. 補助造林地の検査日程について
議長及び書記
(氏名略)

三 議事

昭和二十九年年度春季総会議事録により逐条審議す(傍点筆者)
総会議事の中心をなすものは前年度に決定された規約事項十八ヶ条であつた。翌三十一年の審議事項の中には当年の駐在員報告および追加議事は含まれていない。

この種のものには「初会議記録」として年々書改められるのでよく保存されていて、その間の推移をみる事が出来るが、最も古いものは相模原で明治三〇年にまで遡ることが出来る。また桐原でも明治四四年以来前年度踏襲という形で決議規約帳をなしているが第二表の様に年度別規約内容は年を逐つごとに委しくなっている。

三 規約の審議、決定

村落生活における規約は「共同生活を円満に運営し部落民の利益を得るために定」められるものであり(南田)、また「国の法律とも云可」(市原)基本的な法規であるから部落民全体によつて慎重審議を要するものである。部落規約の審議は前にものべたように主として初会議で決められるようであつて、山田部落で「初会議に於て決定したる事項は自主的に之を遵奉し其の責任を果す職務を有する」としており、下川井野部落会規程では「一月を初会議として、規定の審査、予算及当該年度内の事業計画、業務負担等を審議する」と規定し、その性格を明らかにしている。

部落集会は部落によつては初会議以外の常会について規定している処もあるが、概して初会議以外は問題発生に伴つて行ふ臨時の会合のようである。このような集会は定例のものにせよ臨時的なものにせよ、部落社会において最大関心事が議事にのぼる関係から全戸

第三表 集会における罰金(時間以上を示す)

	遅	刻	欠	席	備	考
南田		5円		10円		
山田	30分	10		50	S34年に廃止	
杉木		20		100	年3度まで免ず	代人可
市原	1時間	200		300	代人 100円	
長野	30分	30			代人可	
	1時間	150				
相模寺	1時間	役の1割				
白小野					代人可	
藤木		100		200	"	
万坂	1時間	10		100	"	
瀬峯		20			"	
麻山谷				50		
後谷	10分	10		200		
	15~1時間	50				
男成		10		20		
川内		10		30	代人可	
下名連石				250		

規定なし……7部落

主の参加が要請され、また会議自体が全員の参加可能な体制のなかで開かれる。「前もつて集合時間を触れ置き、集合の際は一時間前にサイレン又は板木にて合図を成し、参拾分前に式番合図を成し若し不揃の節は参番合図をなす」(万坂)という手段が講ぜられるのも右のような意味をもつからであり、大方が出揃つた処で開始するのである。しかしながら一般の出足は必ずしも快調ではないよう各部落規約では第三表のように遅刻・欠席または代理についての規定や罰則が決められている。

集會に代理を立てることは出来るが、その決議事項について異議申立てはできないことが明示されている部落が多いのはやゝもすれば情に流れようとする部落会のあり方が生んだ知恵とでもいうべきであらうか。だからとくに利害に関する會議には欠席できないわけである。さらに面白いことは、部落御神酒上げの集會においては、「通知時間になれば待合をなさず直ちに開會する」(南田)という規定で、これには洩れなく参加することが予想される。

部落規約は部落ごとに最少限の必要条項が記されるものであるから、形式はさまざまであり、簡単なものではわずか十項しかないものもある。市原の場合でみよう。(原文のまゝ)

規約書

部落規約は国の法律とも云可であるから、是は部落民として是非実力する可である。

一、部落坂谷字竇立場に牛馬を放牧せぬ為、坂平字原野に牛馬を放牧せざる事

二、部落会又部落民の集會す可時間を厳守し速に集會する事、若し指定時間を一時間以上遅れたる場合は金貳百円也の過料金を取立る事、尚差支ある時は其たび事に責任者に其旨届ける事

三、区役に關する事項、区役に対しては必ず夫役出夫は役男なる事、若し差支等ある場合は其たび事に責任者に届ける事

四、部落会又は区役其他の集會の場合、欠席したる者は、一日中集會する場合の欠席に対しては一回金參百円、又半日の時は金百五拾円の出不足料を出費を定む

五、区役又は部落会等に女又は児供を代理として出たる時は、一日集會の時は金壹百円を、又半日の場合は金五拾円を出費を約す

六、農休日毎日一日・十五日とし、休まなかつた家庭から罰金を五百円を徴収する事

七、原野火入れは三月中旬に実行する事

八、県道手入れは毎年四月中旬に実行する事

九、農道手入れは春・八月、年二回実行する事

十、山林の下草刈り、八月下旬に実行する事

また板雑な一例として昭和三十八年度下名連石区の「春季通常總會決議録」では、規約部分はとくに詳しい。

第一号議案 通常總會・臨時總會の件

通常總會は春と秋二回として、他の集會は臨時總會と称す。會議には議長及び書記をおき、手当として役金の半日額を支給する。

手当は部落の役決算日に支払うものとする。

第二号議案 總會開催の件

通常總會は春は三月、秋は八月に開催する。期日は駐在員より通知する。但し差支えあるときはこの限りでない。

第三号議案 下名連石神社祭礼の件

祭礼には各自随意に参拝するも、春の一回に限り御神酒代として一金拾円宛各戸より徴収する。

第四号議案 下名連石神社祭礼余興の件について

祭礼余興は本年度は一回限り二日間舉行する。興行師又は地元請の別を決し、経費分担の人員は話合のとき組長が報告のこと。但し年令については中学校卒業以上敷九年六十才迄とする。

第五号議案 葬儀参列について

伝染病発生ある時は、衛生組長の指示により一般の参列を中止する。

第六号議案 放牧取締について

他町村より牛馬を預り放牧したる時は、過怠金として一頭に付壹千円を徴収する。過怠金は牧野管理維持費として部落財産に繰入れる。

田小野方面からの放牧取締りについては、大石尾・川内部落に監視を委嘱する。

部落内の放牧牛馬が管理外の牧野に紛れ立入つた時は無条件に了解の事。(上・下部落)

第七号議案 牡牛放牧取締の件

満二才以上の牡牛は放牧を禁止する。違反者については過怠金として種付料金の倍額を徴収する。違反した牡牛の発見者には金八〇〇円を支給する。

第八号議案 放牧期日についての件

牛馬の放牧については、本年度は放牧開始日を五月二日とし終牧日を七月十日と定める。但し終牧期日に引取りができなかつた牛馬の所有者は、その旨を直ちに駐在員に報告すること、終牧期日を経過した放牧牛馬の引取りに要する役金は貳百円とする。

第九号議案 牧草取締りの件

干草採草地で朝草を切り取りたる者又は牛馬を繋留したる者は金壹千円を徴収する。過怠金は発見者にその半額を支給し残りの半額は部落財産に繰入れるものとする。

第十号議案 町有原野火入れの件について

原野火入れについてはその筋の許可あり次才駐在員より通知するものとす、火入の際は各戸宅名宛出夫する。

但し出夫は男子に限る。万止むを得ぬ事故あるときは組長に届出

で女子が出夫するも妨げない。女子の出夫に対しては組長証書の場合に限り男子と同等とする。その他の場合に於ては役金の半日額を納入すること。出夫は男子共成年者(万十八才以上)とし全戸式日宛とする。事故ある場合はなるべく代人を雇い出夫に應ずる事、若し出夫出来ないときは第十三条の役金を納入す。

火入れ実施に当つては原野隣接の山林所有者は各自防火線の設備を為しおく事。

下原野火入れの際は山林所有者に通報し、双方協定の上実施すること。

第十一号議案 道路手入の件について

県道手入れについては駐在員の通達により春と秋と二回之を行う。手入れ出夫は二回とも各戸より二名宛出捨とする。

但し出夫の資格は万十七才以上のものとする。男子なき世帯については女子の出夫も妨げない。若し事故等により出夫に應ぜられない場合は手入期間中に金参百円(一日当)過怠金として納入すること。

第十二号議案 当字夫役賦課について

1.地掛は道路・河川・井手

2.戸掛は天災・火災・神社・仏閣

地掛賦課は耕作反別に賦課すること、耕作反別は実行組合より届出反別による。但し河川・井手等は関係者にて一巡出夫をなし、尚終了せざるときは当区の負担とする。

第十三号議案 火災その他の災害に対する出品代金及び夫役金につ

いて

1.第一しめ(二回組) 金百円

2. 出夫役金 (十二月より三月迄) 貳百五拾円

(四月より十一月まで) 参百円

3. 機械組一ヶ月 五拾円

4. 竹一扇 壹百円

三寸三〇本、四寸十五本、五寸十本、六寸六本
七寸四本、八寸三本、九寸二本、尺と五寸二本

第十四号議案 竹の皮、山芋、栗の葉拾い、杉の穂取りについて

他人の所有地内より採取又は採掘した場合は現物を没収し、過怠金として金壹千円を徴収し、半額を山主に半額を発見者に支給する。

但し杉の穂を他人所有の山で山主の許可なく採取した場合は、現物を没収し過怠金として金壹千円を徴収する。過怠金は山主に収めること。

第十五号議案 諸手当について

○連絡員手当 年参万円 (注)

1. 駐在員手当 金百円 (一月当り)

2. 副 " 金参拾円 (〃)

3. 衛生費 金四拾円 (〃)

4. 神社清掃費 金貳千円 (年手当)

各組合は段等割とし、生活扶助者は除外する。

(注) 白米一升分一三〇円とし部落戸数二三一戸として算出したものである。

第十六号議案 会議無届欠席等に対する過怠金の徴収について

1. 無届欠席者過怠金

十二月〜三月 貳百五拾円

四月〜十一月 三百円

2. 遅刻者・無届退場者過怠金 参拾円

右金額を徴収する。

第十七号議案 家畜等の野荒し取締りの件

鶏飼育は年間欄飼とする。若し放飼ひをなし他人の作物を荒したる場合は一応飼主に届け、現物を没収し作物の被害額を弁償せしむるものとす。飼鳩も之に準ずる。

仔牛等は飼主において嚴重に取締ること、若し他人の作物を荒したるときはその被害程度に応じて飼主が弁償すること。

以上の精粗二つの規約によつて、規約の記載事項はほぼ推測できるが、こゝで規定されるものは村落生活における共通の利害が中心になつてゐる。これら二つの規約を含めて三十二部落規約の内容を分類してみると第四表のような結果がみられる。

四 規約の内容

1. 役員および役員給与

部落における主要な役職は区長 (部落総代)・組長・宮総代・実行組合長・肝煎などであり、集会において選挙または推薦によつて選出される。南田では次のように規定される。

一、本部落内に左の役職を定め、一般部落内の規約運営又対外的の事務に当る。

1. 区長 壹名

2. 組長 四名

3. 外に数名を置く

二、区長は部落を代表し、一般的運営に当る事とす

(注) 白米一升分一三〇四とし部落戸数三二一戸として算出したものである。

第十六号議案 会議無届欠席等に対する過怠金の徴収について
 1. 無届欠席者過怠金
 十二月〜三月 貳百五十拾円

の事務に当る。
 1. 区長 老名
 2. 組長 四名
 3. 外に数名を置く
 二、区長は部落を代表し、一般的運営に当る事とす

第四表 規約内容別一覧

	集会	役職	夫役	役賦課	共有地		用水権	家畜	会計	農休日	作障	葬祭	その他	罰則	備考
					山林	神田									
南田	○	○	○												山林売買搬出 路損害費徴収部 落運営資金産出 法
山田	○	○	○										会、家※		会、出不、家世話係備付帳簿
杉木	○	○	○				○役					○	会、家、区、休		
市原	○		○		○							○	会、家、区、休		
芦屋田			○										山		
寺川	○		○												
梅木	○		○												
下大川	○		○												他人山林
千滝	○		○												
桐原		○	○												
犬飼	○	○	○				○役					○	区		
田吉	○	○	○												
白石			○												
相藤寺			○												
長野	○	○	○				○役					○	休、家		木材搬出 他人山林
笈石	○	○	○									○	山		
牧野	○	○	○									○	休、家、区		
白小野	○	○	○									○	山		
藤木	○	○	○									○	山、家		
万坂	○	○	○				○池						会		用水路組合規約 他人山林 区入木材搬出
瀬峯	○	○	○										会		
北川内			○										会		
入佐			○										会		
麻山	○	○	○				○役						会		
後谷	○	○	○										家、会		他人山林
下川井野	○	○	○										山		他人山林
小笹	○	○	○										山		他人山林
男成	○	○	○										山		他人山林
川内	○	○	○										山		他人山林
才三	○	○	○										山、会、区、		木材搬出 他人山林
才一	○	○	○										山、会、区、		木材搬出 他人山林
田小野	○	○	○										山		木材搬出 他人山林
横野	○	○	○										山		木材搬出 他人山林
大野	○	○	○										山		木材搬出 他人山林
長田	○	○	○										山		木材搬出 他人山林
小原	○	○	○										山		木材搬出 他人山林

※ 会：会議・家：家畜・出不：出不足・区：区役・休：農休・山：山林・入：入会規定の略である

三、組長は区長を輔佐し各組内的一般世話に当る事とす

下川井野では区長、組長の職務は稍具體的で、

区長は部落共有財産を管理し、諸帳簿を整備し、部落会を統理代表する、組長は区長を輔佐し、第一条（省略）目的に協力する、

とされ、藤木では総代が全面的に働いている。

衛生組長は二名、一名は当時部落総代一名は公民館衛生部長とする、

宮総代三名とし、一名は当時部落総代、他の組より二名選定する。

万坂では

氏子総代の件 氏子総代は従来村方と個人との間において、期間三ヶ年としてきやくし有るも、昭和二十六年旧一月二十日日期満了となり、初会議にて左の如く決定したり、山宮神社、大日堂の管理を村方にて管理することに協定したり、新旧正月十五日初詣会（二回）のさい銭は村方収得とする、祭儀には総代之に当り、各組長立会を止め廻り組により立合する事、昭和二十八年度初会議において決定する、新旧初詣以外のさい銭供米は総代役得と定む、

麻山前谷では

組長は組内の宮・学校等に関した連絡、負担金の徴集等兼務する事がある

としている。これら役員を選出は選挙、推薦が行なわれる。下川井野の例では

部落会の区長及役職員は、その被選挙権を有するものについ

て、部落民世帯の代表者の投票に依り之を選挙する、但しその過半数に達しない時は決戦投票を以て決する

区長・組長の在職期間は二年～一年である。

牧野では次のようになってゐる。

区長・組長の在職期間は満武ヶ年とし満期の節は例により初会議の当日選挙を執行し決定するものとす

部落区長（総代）はこのように、部落内において自治運営の責任者として選出され、従つて選出に当つては適格者が選ばれ、他に適格者がなければ再選も妨げないものである。その任務は部落の財産・衛生・祭礼に関するものであるが、仕事は単に部落内の問題に止まらず他の部落・町当局との接衝もその手に委ねられてゐるわけ、総代という呼称はそのような立場を示すものであらう。

又一方町政の側よりすれば部落は部落自治に止まるものでないから、概して当時部落を把握している区長（総代）は町政の末端としての機軸に属することになる。かくて矢部町駐在区設置条例によつて区長は、区と町当局との接点として町政の伝達・施行・調査等の拠り所にもなつて来る。下川井野の例では

下川井野部落は矢部町駐在区設置条例に基き原則として区長を駐在員として推薦する

とされており、町政機軸の一端をになう存在であることが示される。

区長・組長のもとにあつてその補助の任に当るものに肝入り（肝煎）があり、部落によつてその役割に相違がある。以下羅列する。

1. 爰石 肝入は各組毎に実行し当番の者は何回でも要件を徹底させる事

2. 山田 肝煎りは左の責任を有す

① 肝煎りを終りたる場合は、其の旨世話係に報告す

② 特に「ふれ」其他事故ありたる場合は報告の責任を有す

3. 長野 肝煎

④ 各戸順回とす

◎ (氏名四名略) は順回をいらず、役算用時に各弍百五拾円

支払ふ事

4. 杉木 通達係ハ上・下二組二分

5. 下川井野 連絡員は当分の間区長在任地の輪番制による

6. 小笹 肝入給の件

一戸に就き三〇円とする

7. 牧野 肝煎は初会議の当日報酬額を定め

8. 入佐 使長(氏名略) 給料戸を百円

以上八例のうち1~5は全戸が順番に肝煎をつとめているが、6~8の場合には固定した一人が手当を貰うのでその個人が肝煎となっているのである。肝煎と世話係とを識別した例もあるが、概してその任務は諸事連絡・ふれ・徴収・使走りなどである。前者のように各戸順番で勤めるようなところでは後述する役夫の一つとなつてゐる例もある。

以上の役職に関する給与は(1)金額を決めている所と(2)各戸当り負担額による所の二種であり、前者では男成で次の如き金額である。

各役風の報酬について

駐在員 八〇〇〇円

部落委員 三〇〇〇円(三名)

公民館長 三〇〇〇円

水道委員長 二〇〇〇円

水道委員 一八〇〇円(二名)

南田ではずつと少なく、区長千円・生産組長千円・組長五百円・生産副長五百円等となつてゐる。両者の比較によつて役員の給与がまちまちであることがわかる。

後者の例として麻山後谷をみると

役員手当

一、駐在員 一戸当二〇〇円

一、農家組合長 一〇〇円

副組合長 五〇円

一、組長 一〇〇円

一、評価委員手当 一人に付二〇〇円

となつてゐる。駐在員が重大な任務であるだけに多いことが判るが、農家組合長手当は農家に限つて徴収される(他は各戸から徴収)。これら役職給与に関して興味ある事項は次の牧野における肝煎報酬であらう。

肝煎は初会議の当日報酬額を定め、その報酬は玄米と規定するも、其の

当時の米価を以て現金に換算し支払ふことが出来る。

こゝでは手当は原則として玄米の規定である、これは戦前における農村で現金収入の道が開けてない時代を想起させる。役員給与も以前はこのような現物給与でなされたものではあるまいか。

2 寄留

村落生活は元来封鎖的伝統的な性格のものであるから、部落が発展して異質な人々にも解放される場合、とくに部落共有財産などの

權利については自己防衛せざるを得ない。こゝに他所者に対する排他性と警戒心とがある。これらは社会調査における諸報告に詳しいので省略するが、しかし前述のように現実の部落は行政機関の末端細胞でもあり、他所者を拒否することはできない。

この場合の対応の仕方としては二つの方法があげられよう。その一つは市街部にみられるもので、来住者が多くそれらの人達だけで一つの組織を作り得る場合には、部落が解消され同化されてしまう（下市・下馬尾・浜町）か、または旧来の人々だけで組をつくる（千滝元組・下大川元組）、前者には元からの人も商業などに転じ町内会的な伝達機関や祭り組に寄付だけになつてしまつて吸収されておき、町周辺部の場合には依然として農業に従事するものが多いのでまだ共有の利害を負うことも多く、權利を保持している。

第二の場合は、純農村部への転入である。農村部への転入が農業経営のために行なわれることはまずないであろうから、転入者は農業を営む部落構成員とは異質のものである。しかしながら村落自身は行政村のもとに属するものであるから、当然村人としての取扱いは必要でありこの点が考慮される。

稻生野規約では「寄留を求める者は区内の承諾を得て、尚、寄留者は証人を附し申出」することが要求され、牧野ではその手続きの第一に区長への申出をあげ「本区内に居住をなすものは直ちに一応区長に申出をなし、其上役場に転入届を提出」するをもつて手続きが法的に完了することになっている。こゝでは何よりも区長一區民の承諾が必要であり、共同体規制が優先するさまをしめしている。一方そのような制約は寄留者のみならず貸主にも及ぶもので、白小野では「他人に家を貸す時は、区長・組長に相談の上貸付るも

のとす、借主の不始末の場合は家主よりすること」として貸主・借主ともに区民との融和が要求されている。

而して居住が認められるや「区の諸公役及び其の他区民のなすべき責任を実行する」（牧野）こと「区民同様の義務履行のこと」（炭石）が決められる。しかしながら、寄留者の場合には村民としての權利を獲得はできないわけで、例えば牧野では寄留者が牛馬を飼育する場合「採算料金として金五拾円宛」納めることがきめられ、また炭石でも寄留者は「部落有地納税等」については義務はない。当然のことながら部落有地の恩恵に与れないわけである。寄留者の義務負担についての意見の齟齬は免れなかつたようである。川内では次のように決められている。「一時的な居住者についての判断は駐在員委員にて行い、夫役等は考慮する。又住宅を貸す場合、家主は借主に部落の慣例を充分説明し、問題の起らないようにしておく、尚本部落に新たに居住する人には駐在員より以上の点を充分説明する」従つて同じく区民としての義務といつても寄留者の場合は完全に他と同等の權利を有しないのであるから、それだけ考慮されると見てよいであろう。

3 部落民の義務負担

規約において農民の関心ある事柄をみるとその一つは部落運営費および区役にあるといえよう。行政村の場合とは違つてもつとも密接に生活に響く事柄である点でこの右に出るものはないであろう。しかも部落を中心とする行事は主として労役の提供による事柄であるから、全員を義務づけなければ到底なし得ない。そこで規約上に現わされるのである。義務は主として（イ）役賦課と（ロ）区役である。

（イ）役賦課

昭和三十一年 横野部落総決算

収入の部

9,900	戸割 1 戸当り 300 円の 33 戸分
3,800	役男割 1 人当り 100 円の 38 人分
○ 20,775	免田米代
17,428	部落地租割、賃価 1 円に対し 4 円
○ 2,271	共有出不足金
○ 24,743	立木入札其の他雑収入
○ 5,230	草場入札残金
28,380	他部落役金 賃価 1 円に対し 20 円
1,000	九電よりの役金
計 113,527	

部落における経常費および特別工事などの費用の負担を役（金）または役賦課・役算用といっている。男成の規約では部落総決算の件

役算用（総決算）は笹原井手下と井手上を総合算とし、地租六割・戸四割とする。

こうしてあてられた役金が部落経費となるのである。少し問題もあるが部落会計の一例を横野の昭和三十一年の総決算にみると次の如くであるが、部落の経費は共有地からの収入（○印）のほかは戸割・

第五表 役賦課の比率

部落名	賦課方法、および比率
長 野	新田 3, 古田 3, 戸 2, 役男 2
犬 飼	新田 4, 古田 2, 戸 2, 役男 2
田 吉	耕作地（田 100, 畑 50, 原野 10）戸
笈 石	戸 3, 受益者 3, 反別 4
相藤寺	田 7.5, 戸 2.5
万 坂	戸 5, 地祖 5
入 佐	戸 80 %, 100 円, 役男 150 円
下川井野	資産 7, 戸 3
小 笹	地祖 4, 戸 4, 役男 2
男 成	地祖 6, 戸 4
川 内	資力 6, 戸 4 …… 13 段等

支出の部

30,310	人夫賃
61,403	部落諸雑費
2,000	消防団夜警費
5,000	年度末決算費
375	坂口電灯料
14,400	共有割戻金
計 113,488	(1 戸当り 600 円)

役男割・地租割による負担ですべて賄われるのである。(横野での役負担は戸の場合三三戸であるが共有割戻金は二四戸であることが注目される)役負担について不公平でないようにという工夫がなされていることは第五表にみるように各地でその賦課に差異があることで推察できよう。この場合地租又は耕地に対しての役金は、他部落の者にも掛けられるわけで、横野では部落内役金よりも高くついている。下川井野でも

部落内に他部落の所有地のある場合は、その所有者に対し従来^〇の慣習に従い適当なる範囲内に於て賦課徴収することができるとしている。これは役賦課を耕地中心に考えた結果であろう。また

田所や川内では「田所部落が越前の賦課をしない様決定しているの^〇で、町等で話し合つて貰う、川内も他部落に賦課しないで払わない」(川内部落常会帳)部落内賦課をしているが、風人主観的な考え方によるものであろうか。

(四)区役

農村に於て生活上の必要から諸種の共同作業が要請される。村落として共通の利害がある共有地の管理や道路・用水路の補修などは全員の作業によつてなされる。これが区役(公役・夫役)であり、次の五種に分かれる。

1. 道路改修
2. 原野・山林の管理
3. 用水路の補修・管理
4. 災害における救済
5. その他

まず道路改修については、県道・町道・農道・野道など所管を異に

し、その機能も異なるのでその取扱いは自ら差違がある。県道・町道の場合主として年二回の修理には全員が出役し費用は部落から出されたり、全員総出の上「何日でも無報酬」(大飼)であり、また出捨役・奉仕作業の性格が強いのは、これらの道が部落全員の利用する処であるからであらう。農道や野道の場合には受益者が中心(後谷・箕石・入佐・白小野)とされる例がみられたり、非農家は女でも可とする(白小野)のは、農道・野道が非農家には全く利用されない事によるものであらう。横野では昭和三年に「横野農道部落規約」ができて、木材業者の道路損壊を補償させている。これなどは受益者負担の進展とみてよいであらう。

山林・原野に関する区役としては植林・山林下刈り・野焼があげられるが、部落共有地とはいつても用益権は旧来の村民に限られるから受益者の出役に限られる。横野ではこの出役は共有役といつて一般役と区別している。

用水に關しての区役は、農耕生活上重要な事項である割に少なく、杉木・長野・田吉・後谷が戸割または奉仕作業であるほか、麻山・下名連石では水路ごとに地主負担の作業になつてゐる。但し新規井手工事(箕石)や災害(牧野)には全員出夫するようになつてゐる。部落規約に用水路役の規定が少ないのは各用水組合ごとに規約があり、受益者単位の慣行があるからだと思われる。

村落生活の共同性は非常災害における相互扶助的な夫役にとくに顯著である。牧野では用水路について「不可抗力の爲めに大破損崩壊等個所を生じたる時は田地所有者以外と雖も」協力が要請され、下名連石でも「戸掛は天災・火災・神社・仏閣」と全戸の援助がきめられ、後谷でも家屋、飲料水は夫役と部落負担とするなど救済へ

明治15年における牛馬頭数

	牝牛	牝牛	牡馬	牝馬	物産		農家戸数
					牛	馬	
山本郡	34	15	136	2,870			
菊池郡	46	810	48	4,816	15		
合志郡	131	7,701	158	7,865	183	46	
飽田郡	486	58	1,363	4,087		233	
詫麻郡	4	4	125	2,574			
山鹿郡	44	37	2,904	2,792			
・上益城郡	2,690	4,028	387	12,008	1,070	1,090	
・(う)矢部町	1,845	2,046	126	3,297	836	407	2,474

の共同作業は顯著である。

以上にみた部落民の義務負担は概して權利に關する處が大きく、事項によつて(A)全戸が義務を負う場合(横野の一般役・戸割・出捨役・奉仕作業・総出夫などよばれる)と(B)受益者のみが出夫する場合(横野の共有役など)に分かれ、主として前者が役男(十七才位から六五才迄)の出夫を要請するのに対して、後者では受益者以外は女、老人でも認められる点若干の相違が指摘できよう。而して区役に出役しなければ過料金が課せられる。(過料金については後述)

4 家畜飼育

家畜飼育に關する規定は第四表に示されるように、ほとんどの部落規約にみられる。古くからこの町では家畜飼育が盛んだつたようで、明治十年代における牛馬頭数を他地方と比較してみると自ら明かにされよう。以後所謂「矢部牛」の産地として著名になつた土地だけに、家畜飼育に關する諸規定は寧ろ当然とせねばならない。家畜飼育上の規定は大別して(イ)仔牛生産および牛馬つくり、(ロ)家畜飼育に伴う食害補償、(ハ)採

草・放牧に關するもの、の三項にわけられる。

(イ)仔牛生産および牛馬つくり、牛馬の生産は農家の数少ない現金収入源であり、かつ(ロ)の点で他の人々に迷惑をかけるという点から部落民への披露という形をとつてゐる。相勝寺では「牛の仔祝いは五月十五日とし、酒は牡牝五合宛とする、諸準備は当番制とする」とあり、犬飼では「仔牛生産御神酒代として二百円を納入することになつてゐる。また芦屋田でも子牛馬祭りに一頭当り酒五合を出して行なわれる。しかし男成では「満二才より成牛と見なし、一頭に付百拾円宛を畜協総代取集め」て牛馬祝をする。これらが仔牛の生産祝であるとともに一種の役金であることは「一頭につきいくら」という額の指定によつて窺えるが、大野では仔牛祝酒一升のほかに「仔牛の負担金」年二百円が賦課されてゐて、完全な役金である。つぎに家畜の手入れは「馬つくれ」「牛馬つくろい」と呼ばれて、現在では少なくなつたが、かつては殆んど部落で行なわれる家畜の手入・検診であつた。笠石では「部落内に牛馬を飼育する者は全員加入する事、使用家畜は全頭加入する事」とされ、「年四回として当番四人に於て一ケ年間の責任を負担」する他は清酒一升ずつ提出することになつてゐる。万坂でも「牛馬つくろいは獣医師のみにて、座主にて接待をなすこと」とされ、旧来年四・六回の「馬つくろい」が農家の慰安日であつたに比して、著るしく簡略化されて来たことが示される。

(ロ)家畜飼育に伴う食害補償に關する事項は殆んど部落でみられる。その多くは放し飼いの禁止に關する事項であつて、仔牛の出産届は三週間以内区長に届出を成す事、昭和三十三年度の初会議にて、仔牛の放飼をやめ生後何日かを問はず、親牛を出

す場合は止むを得ず、その他は絶対に自分の宅地より外に出ず事を得ず、尚親牛のはなしがいはいは絶対にする事を得ず、(万坂)

牛馬の子は生後駐在員に報告し四ヶ月までは放し、其の後は繋ぎ止ること、駐在員は四ヶ月に達したごとを部落に知らせ(田吉)仔牛はセリ市出後は一切放飼することは出来ない、小牛と雖も二月より四月迄は麦作食害のため放飼することは出来ない

(藤木)

牛馬は牡は生後一二〇日・牝は一五〇日間放飼を認め、以後は放つ事を禁ず

牛馬を放つ期間中仔牛馬には生年月日・所有者名を明記した木札をさげるものとする(山田)

ところにより全く禁止するところも少なくないが、一応四〜七カ月の放し飼いを取締つてゐる。鶏の場合も同様に規定される。

鶏は屋敷外には一切出さぬ事、鶏は全部田鳥として無断で放飼の場合にはコロシテもよい(爰石)

鶏飼育者は必ず欄飼をなすこと、特に苗代時期と稲の出穂より収穫迄の期間中に放飼の場合は、撲殺されるも飼育者に於て異議なき事(稻生野)

鶏は秋彼岸前より春彼岸迄は一戸四羽迄とす、若し四羽以上を飼う時は一羽に付金百円を徴収す、二月一日より五月三十一日迄は放ら飼をなす事を禁ず(麦作又は苗代食害の爲)、時期来らば総代より(彼岸十日前)触れ示す事(藤木)

ニハトリハ農作物ニ被害あたえざる様(犬飼)

このような仔牛・鶏の放し飼いの制限の条項が殆んどの部落規約に設けられているのは、食害の補償を決めるためであつて、

牛馬は各自常に注意し、他人の耕作物を著しく荒したる場合は相方立会の上相当の弁償をなすこと(田吉)

他人の農作物に被害を与えたる場合は、駐在員組長の見積りを得て損害を支払うものとす(男成)

などでは単に損害賠償に止まるが、山田では農作物被害に加えて「2(筆者注放し飼いの禁止事項)に違反したる場合は一頭につき一〇〇円の過料を徴収する」ことになり、規約違反の取締りをうける。同じような制限は

右イ項(筆者注留規定)を犯したるものは注意三回毎に役一人分差引くものとする(長野)

若し規定を守らざる場合は所有者なきものとして捕獲するも異議なきもの(下川井野)

にみられるが、牛馬鶏の食害が屢々起りその結果部落内の戸が対立することがあつて、このようなきびしい制限となつたと思われる。一応の傾向としては、新しい規約ほどその制限がきびしいようである。

(イ)採草・放牧に関するもの、まず採草については自分の管理地からの草切りが要求されることは云うまでもない。「他の山林に牛馬を放すこと(万坂)は勿論禁止され、他人の所有地内の草木は一切伐採せざること」(瀬峯)田畑畦畔の草は上六・下四の比率で分配される(芦屋田、男成)。共有原野は多くの場合干草採草であるが、この利用には入会・貸付けの二方法がみられる。

入会による例は芦屋田・藤木・下名連石にみられる。

カシキ切は八十八夜より二十日下りとする事、右は昭和32年4月1日初会於てせるを今日迄勵行(芦屋田)

萱寄せは一戸に付二駄と定む、但し四十駄以上の屋根替えに限る

(藤木)

大矢野原干草切込の件、十月四日を切込みと決定する。

笹原口えの切込みは、切込期日二日目に希望者のみにて草分けすることとは昨年と同様とする

採草場売却の件、組内に希望なきときは他人に売却するも他の草場を荒さざる限り差支えなきこと(下名連石)

とくに下名連石の規定は詳細で、このほか干草運搬や原野税の納入との関係なども決めている。

共有原野を希望または順番に従つて貸付け(上草だけ売却)する部落は白小野・相藤寺・下川井野・長田などである。

部落共有原野一部貸付地は、貸付台帳に基き三ヶ年の期限とし、使用料についてはその都度審議の上更新する(白小野)

共有原野採草地の入札は初会に行ふ(長岡) 共有原野利用についての条項を持たぬ部落のうち原野火入・原野税などの規定から共有地を有していると思われる部落は南田・市原・長野・田吉・牧野・入佐・明成・稻生野・桐原・大野・横野の十一部落に及んでいる。これらの部落共有地は慣行により利用されていると考えられる。

放牧については④稻生野と⑤下名連石の二部落がそれぞれ次の如き規定をもつにすぎない。

④放牧期日・放牧期間における牡牛取締り

⑤放牧取締(他部落・牛小作)・牡牛放牧取締・放牧期日

下名連石の他部落の放牧取締りには「田小野方面からの放牧取締り」の規定があるから田小野で放牧がなされていることが判るが、田小野規程ではこれにふれていない。この点も慣行によつて実施さ

れているといえよう。

以上家畜飼育に関する規約では、とくに規約内容は具体的なあり方についてふれることが少なく禁止・制裁事項に主力が注がれているように思われる。

5 作障り、境界

農地に隣接する山林は農耕生活にとつて障害をなすものであるが、互いに私有財産であつてみれば勝手に処分すべき性格のものではない。そんな点からこのような規定が設けられるのであろう。それは境界とも関連する。

作障りは三月十五日に一斉に出役し、例年の規定により実施す

(山岡)

耕作者の他人の所有地に妨げ被害をなす所にて、昭和三十四年二月二十日現在(竹木が)被害をなす所は各人自発的に伐採する

(南田)

耕地ニ接スル山林原野ノ竹木ハ左ノ通り伐採スルコト

北側三間、東西南側ハ六間

但シ土地台帳ノ地目ノ田畑ニシテ荒地ヲ開墾シタル場合ハ可、又山林原野ヲ開墾シタル場合ハ此ノ限りニアラス(杉木)

近年とくに植林・開墾など地目の変化がみられるところではこのような紛争が目立つて来るようで、次の各地にみられる。

爾今新に造林する場合は境界線より各々四尺宛退き造林する事

(稻生野)

今後植林を為さんとする時は作障り等を良心的に考慮し植林を為すこと、万一相互間に故障が生じたる時は部落民の協定に任せること

(白石)

農民の土地に対する執着は想像以上のものであるが、それ故に境界に関する紛争も起る。それは主に伝統的な慣行によつて処理されるのであろうか、次の二例をみるのみである。

山林原野ノ境界ハ堀切ナシ置クコト

境界立出シ過分ニシテ村方全体ヲ以テ境界ヲ定メタルモ此レニ服セズ、勝手ニ自宅境界説ヲ固持スルモノハ、規約違反トシテ金三〇〇円徴収スル（杉木）

山林原野田畑の境界の紛争を勃発せし時は必ず区長組長及び隣地主の監検を求め査定をなし、万一区長組長の査定に異議ありて応じ難き時は、区長組長の出張日当一人宛金五拾円一応区長より徴収して各組長へ分与す、猶境界査定当日は所有主は双方共立合するものとす（牧野）

区長・組長あるいは村方一同の意見によつて境界紛争は解決するのであつて、共同生活体制の強固さが示されよう。

6 山林原野・神田（共有地）

矢部町における部落共有地の比率は第一表に掲げた通りであつて、主として山林原野であり耕地としては僅かな神田が所在するにすぎない。採草場については前に述べたので之を省略する。

共有山林の育成は従来価値なきもの（交通路劣悪と市場への遠距離などの諸条件から）とされていたが、近年交通路の整備・発達に伴つて注目され、例えば横野では昭和三八年度より字下の鶴（原野）および字新道（萱場）に松・杉を新植育成するなど、（前項作障・境界の項にも二・三植林規定がある）、新局面を展開している。

（共有地）植林は短期にありては収益なきも、後年に至りては本

区の基本財産となり、多大なる収益を有するものなれば、成可く荒蕪地の個所には植林をなし、後日本区の福利増進を計るものとする（牧野）

これら共有林の手入れは区役によつてなされる（牧野・芦屋田）が、男成では人夫によつてなされる。この外に共同草切場における立木は草場が入札される処でも別個に処理され部落の有力な財源となつてゐる。

共有林に関する規定が少ないのと対照的に多いのは私有林に関する規定であるが、その内容は主として山荒の禁止規定である。

粟の実拾ひ・竹の皮拾ひは絶対に他人の山に無断で入つてはならない、入る場合は所有者にことわる事（麻山）

薪取ハ外ノ人ノ山ニ切物行事禁ズ（犬飼）

他人の山林内に於て薪木及竹皮等採取する事を禁ず（小笹）

他人の山林に牛馬を放し、又はナタ・鋸等をもつてマキ取りその他を禁ず、見当りたる時は区長・組長に通告し相当額の処分を成す事（芦屋田）

このような規定は炭石・稻生野・下名運石・藤木・白小野・瀬峯にあつて広くみられる。しかもこれは本来的には刑法にもふれる事柄であるが耕地の作物荒しにくらべて頻繁にみられるのは、山林が一般にどの山にでも入つて入用なものをとつて来るというような性格を有していたからではなからうか。とくに前述のように交通が不便で価値を有しなかつた時代に慣行的に行われたものが、経済的变化によつて価値をもち山林所有が意味を持つて来るのに対し、従来の慣行がまだ改まつていないのではなからうか。

同じような意味で注目されるのは木材運搬およびそれに伴う道路

破損に関するものである。

改修農道の木材の地太引は許さないこと（白小野）

木材搬出に依る道路の破損は事業主及び山主に於て修理をなす事とし、道路の使用は駐在員の許可を受ける事

木材を地引にて運搬する場合は破損料として部落内業者は石金五四、部落外業者は石十円小車・木馬は半額を前金にて徴収する、特に破損の場合は更に要求する（箕石）

とくに横野では昭和三十三年に「横野農道部落条例」が設けられ六項目について詳しく規定されている。更には道路破損料を超える部落への礼金として「山林売主は売上金額拾万円以上は酒壺升以上を、買主は貳升以上を各徴収するものとす、（百石以上は金壺千円以上を徴収す）」（南田）に至つては、どう考えても道路修理に端を発するとは云えないように思われる。この規定ではとくに部落外の業者に対して苛酷である点が特徴的であるが、部落内においては山林売主に対する平均化（或種のねたみ）さえ感じられる。牛馬産出者への出金の要求とも共通するものがあるのではなからうか。

つぎに神田の状態をみると、昭和二十四年の農地改革を経ていたに山林・原野に比して変化もあり、またその小作には二・三の差異がみられる。まず神田を有するものは南田・山田・芦屋田・田吉・藤木・大野・長田・桐原の八部落であるが、いずれも戸数の少ない部落であることを共通とする。この耕作方法としては、山田では「ひやくだ」のみ部落共同耕作をなし各戸より厩肥一荷を持出し、灌漑水の見廻りは座前にて及び、畦畔の草は座前に於て管理するものとす、「ひやくだ」以外の耕作者は前年通りとする。

とあつて神田に二種の経営方式がとられている。芦屋田では「祭田

は座前に於て使用する」が、この座前は桐原では入札（祭田＝宮田）によつてきめられる。右以外の処では三・四年間の小作が順に従つて廻つてゐる。この小作料は田吉をのぞいて玄米でなされている。万坂では

昭和二十四年度農地改革により、深迫、地蔵田・菅ノ谷・カラス山神田を無価格にて「氏に地上権をゆすりわたしたるに
より」氏に村方大祭に玄米一俵をさし出す事

右のような協定がなされている。郷社小一領神社の神主男成悱次郎氏の言によれば、農地改革以前は殆んどの部落に宮田（神田）があつたとの事であるが、現在他の部落では宮田（神田）は消滅したのであろうか神田に関する規定はみられない。

この他神社祭礼費用として個人負担または部落民の分担金を記す箕石・相藤寺・川内・下名連石は神田はすでに処分された結果であらう。

7 祭祀

宝暦九年の「上益城矢部手永村々神社改御帳」（写）によれば、現矢部町には男成大明神（男成）・小一領大明神（浜町）・白谷大明神（菅）・天神社（笹原）権現社天神社八幡社（入佐）・矢村大明神（下大川）・年社大明神（北中島）・年社大明神（中島）・山王社（木鷲島野）・御泊大明神（葛原）・社村大明神（猿渡）・乙牛大明神（麻生）・歳大明神（下名連石）・山王社（三ヶ）・歳大明神（目丸）があり、男成社は十五村、小一領社は十四町村の氏神であつた。しかしながら現在の部落生活ではこれら（郷）氏神は余り崇敬の対象とならず、それらの部落氏神が専ら崇敬の中心となつてゐる。

第六表 規約違反の処遇

部落名	集 会		家畜放飼		出 役		山野荒	放牧地 共有地	農休日	その他	備 考
	チコク	欠 席	鶏	牛	出 捨	普 通					
南 田	5	※ 10	△								罰金
山 田	10	50	△	△100		200					
杉 木	20	100	300	50			※ 植林300			※ 境界300	違約金
市 原	200	300				300			※ 500		罰金
芦 屋 田							△				
寺 川	20	100	50	200		400					
下大川		(無)100 (故)除名	※ 又は300	△		(女代) 100					罰金
千 滝					200						
桐 原					200						
長 田	10	50		△	300		200				
大 野					300						
長 野	30~150		役1人	役1人	役金倍				役1人		
田 吉				△							
笈 石		(無) 役1人				1時間 1割引	※ 1000				過料
相 藤 寺					200						
小 原											
牧 野							△				
白小野					300	役1人	※ 500~1000				罰金
藤 木	100	200	100	50	300	役1人 (無)30	※ 100				過料
万 坂	10	100									
瀬 峯	20				350		※ 1000				井手の山芋堀り、科料金
北 川 内		400							※ 500		課料
三 ケ	50	200					※ 草100,山500				課料
麻 山	5	50		△	他所役の 倍						
後 谷	10~50	200	100	△							
下川井野		役1人									
小 笹				△	120						
男 成	10	20		△			△	△			
川 内	10	30			役 金						
横 野					250						
稻 生 野					400		△				
下名連石	30	役 金		△	300		1000	※ 牡牛500 草荒1000※ 牡牛(種付料 金の倍額)			発見者に500円 罰金 発見者に500~ 800円 過怠金
田 小 野		200			300						

(※) 名称は備考欄参照 (無)は無屈、(故)は故意、△は弁償、(女代)は男がいらないから女が出ることを表す。

部落内の神社・堂祠は部落民の負担において維持される。万坂では山宮神社・大日堂・公民館の補修は「上中下に別ち順番廻しとし三十七年度は中組」とし、区長の指示によりこれを行う。また下名連石の昭和三年追加議事には金福寺屋根補修について「寺総代において損傷の程度を調査し各戸割当をなすこと」が決められるなどの規定に示されよう。

近年の新生活運動の推進に伴なつて祭祀は簡略化の傾向にあり、小祭は合同祭にして春の彼岸に実施（笈石）

村内神社の年三回の祭りをまとめて十一月十五日一〇〇円持出しで部落全体で行う（川内）

などのように合同祭もあるが、長野では一月に大祭・祭・火除祭の三つがあり、藤木では十一月から二月までのうちに三度の祭がある。桐原では妙見・観音・祇園・天神・地藏・虚空蔵・風神・水神各祭が八回に亘つて行なわれる。但しすべて酒一升を神酒とし、座前は妙見・祇園・天神と観音・虚空蔵・地藏と風神・水神とを同じ人が勤めることになつてゐる。こゝでは昭和二十三年に「祭田畑ハ從來祭礼年番世話前ヨリ耕作シ来リシヲ生産増強ノ目的ヲ以テ參ケ年ヲ年期トシ入札ヲ以ツテ最高額入札者ヲ耕作者ト決メル事」を協定し、座前は從來の順番によつて之に従事している。神田をもつてない部落では各戸神酒代を負担するが、前者に比して簡略なようで、下名連石では祭礼には余興こそあるが、「祭礼には各自隨意に参拝する」だけである。神田の有無は祭および座に影響しているといえよう。

8 潰地の処理（公共と私的なもの）

前にみたように公共物に対する侵害および私有物に対する侵害は

禁止・制裁事項でのぞんでゐるが、公的なもの（部落的な意味で）と私との関係は如何であらうか。まず會議の項にも現れたように、欠席者は會議の決定に異議を唱えることができないとする規定は、その一つの方向を示すものといえよう。これは境界紛争にもみられることであつた。こゝで明らかに公のため（部落のため）に私有財産が侵される潰地の場合でみると、杉木では、

村道及び野道從來ヨリ通りクル道セマキ処ハ村方一同立会ノ上広ムルコトヲ得、但シ所有者異議申立スル事ヲ得ズ

とあつて、一方一匠の利益が優先されることが明示される。村道とはかくとして野道は一部関係者の利用にかゝる道路であるだけに（だからこそ異議も出るのであらうが）共同体のためという大義名分の前における個人の権利の弱さが目立つ。勿論この潰地に対しては「田坪当り参百円、畑坪当り貳百円、原野山林坪当五拾円」（万坂）程度の補償はなされるから全くの公への奉仕というわけではないが耕地を手放すことを欲しない農民が満足しうはずはなく、共同体規制への犠牲を強いられることになるのである。

この傾向は部落規約全般を流れる基本的な考え方でもあつて、部落生活が共同体中心に営まれることの証でもあらう。これを横に拉げて共同体構成員と非共同体員との場合に当てはまるのであつて、部落民にとつて共有林野・公民館・道路などの使用は何ら支障はないが、部落外の利用にはそこに差（現在では主として使用料）をつけるといふ、共同体の封鎖性ともなるのであらう。

五 罰 則

すでに各項でふれたように部落規約には多く禁止事項を含んでい

るが、それらは必ずしも罰則として部落民を制裁するには至らない。罰則となつてゐる事項は集会遅刻、欠席、家畜放飼、区役、山荒し、農休違反などであり、(第四表の参照)主として違約金・科料・過怠金などとなつてゐる。その処遇は第六表通りである。

部落規約がある三部落のうち罰則規定が全くないのは大飼・梅木・白石の三部落(入佐は不明のため除く)であつて、そこではどのような形で前項の事柄が取扱われているかをみると、大飼では薪取ハ外ノ人ノ山ニ切物行事禁ズ

ニワトリハ農作物ニ被害アタエザル様

牛馬ノ子ハ生産シタル時ハ区長ノ手本ニ届出ル事、農作物ナドニ被害ヲアタエザル様飼主ニオイテ注意スル事

集会会議あるときは時間を守る事

の諸項があり、多分に牽制的であり、また火災で部落規約を焼失した梅木でも

鶏・仔牛等の放飼は別に罰則なくとも各自の良心に従ひ農作物等の被害を少なくする

など専ら「良心的な」点で違反を抑える方法をとつてゐる。従つて部落規約の一般的性格として罰則規定を伴ふことは否定できないことであらう。このような罰則が村落生活のどの部分に適用されるかという事は、部落規約が部落生活に及ぼす範圍をみる上でも重要な視点であり、部落規約の機能を示すものでもあらう。

まず最も多い罰則は、集会・家畜放飼・出役に関するものである。部落生活における共同体的経営に関する右の事項に罰則が集まることは、部落の共同体的性格が非常に強く個人の経営・生活を規制してゐるものの現われであらう。勿論それら部落的経営が部落

民の参加によつて成立する集会によつて決定され、また部落民全体の署名によつて効力を発するとはいへ、部落的立場において規約が決定される以上個人の利害と完全に一致することは有り得ないわけだ、こゝにその統制なり秩序なりをみだすものへの制裁として罰則が必要となるのであらう。従つてこゝにみられるものは國家の法とはかゝわりのない部落的社會内部にのみ通用するものである。しかも村八分とはいわぬまでも「故意に出席を怠りたる場合は除名又は(参百円)の罰金」(下大川)というきびしい制裁がなされることに注意すべきである。共同体的な部落のあり方を單なる村落の自治と解してよいかどうか疑問の条項である。

つぎに多い条項は山荒し・野荒しに関する罰則である。これは当然私有財産の侵害であるから刑事犯に属するのであるが、内容をみると「ナタや鋏」をもつての山荒し禁止よりも「栗の実取り・杉穂取り」など微細なものが多くいふである。國家權力にとつては微細な為に問題にならぬ事柄であるが、部落生活では大きな問題であるところから——とくに山林の持主が部落會議の有力者であらうから——設定されたものであらう。これは小刑事犯として國家權力の譲渡・黙認とみてよいであらう。

才三の事項は共同体的決定と個人財産との衝突の場合である。杉木・三ヶにみられる境界争いの判決が、「村方全体ヲ以テ境界ヲ定メタルモ此ニ服セズ」勝手な事というとして規約違反を問われたり、道路について「村方一同立合ノ上広ムルコトヲ得、但シ所有者異議申立スル事ヲ得ズ」(杉木)といふのは共同体的秩序を重んずる余り個人の財産権を侵害するものであり、近代的法律と矛盾することのよに思われる。農休日の規定についても、もともと「農民

に休日」をという近代的経営から発想されたものであろうが、罰則を伴なうという処に共同体秩序優先という従来の共同体的組帯で統制しようとする部落規約の古さが感じられる。

罰則はとくに共同体的体制の具現として注目せらるべきものといえよう。

結 び

以上にのべた部落規約は、部落が今なお共同体的性格を持つてゐることの現われであらう。しかも農村部にひろく一般的なものとして存在することは、矢部町一帯の社会的発達の段階を示すものとしてそれ自身探究されるべき性質のものと考える。今こゝでは部落規約についてのみ目を向けたが、その要点は次の如きものであるといえよう。

1. 農村部に伝統的なものとして存在すること
2. 部落の集會に図られ、部落共同生活における秩序となること
3. 反面部落生活に関する具体的な運営事項よりも、制限・禁止事項が濃厚であること

このような部落規約は他地域の例（例えば前田正治氏『日本近世村法の研究』および「但馬旧森尾村に於ける明治以降の村法資料」『法と政治三巻二・三号』など）から推察するところでは、近世的村法に著しく類似しており、その継続と考へてもよいように思われる。しかし現在のところ矢部地方では明治三十年の「相藤寺規約」が最も古いものであり、それ以前に溯るか否かは今後の史料探訪によらねばならない。部落規定上細かい規定が多い事項をみると①制限禁止事項と②道路使用——とくに木材搬出に伴なう破損修理——および

び植林規定などあつて、前者が部落共同体の維持という伝統的性格を濃厚にもつての對して、後者は経済的・社会的變動によつて部落生活に新しく発生した事項であり、伝統的慣行によつて処理できない部分に属するものだといえよう。この点を考慮に入れて、村落生活と規約とをみると、規約では共同体的諸権利（入會・用水・道路使用）などの行使に関する規定が余り明確でない点があげられる。これらは農耕生活に不可欠な要因であり、古くから農民はこれらに對する諸權利を有した筈である。かゝる最重要大事に關して規約がふれていないのはそれが伝統的慣習によつたことを物語つてゐるとはいえないであらうか。

もしそれが正しい推論であるならば、部落規約は慣行と同じ点から出発し、同じく共同体体制の保存維持——部落社会生活の維持——を目的としながらも、時宜に応じて變化した（あるいは守られるべき規程の變化に伴つた）部分の集積であるとも云えるであらう。村落生活は慣行と規約という二重の枠によつて規制され営まれてゐるというべきであらう。（三八・六・三〇）

△付記▽

本稿に關する基礎史料調査には矢部町各部落駐在員各位の御理解と御厚情によるところが大きく、また調査分折に關しては、関西学院大前田正治氏・東京教育大千葉正士氏・滋賀大原田敏九氏・熊本県史編さん室花岡興輝氏から激励と参考文献を頂いた。以上の各位に深く感謝の意を表する。